



芥川龍之介

鳥界ハ

登場人物

◆ 禅智内供

◆ 弟子

◆ 中童子

◆極楽。御釈迦様が地獄にいる健陀多に目を留める。

◆ナレーター

禅智内供の鼻と云えば、池の尾で知らない者はない。長さは五六寸あって
 上唇の上から顎の下まで下っている。形は元も先も同じように太い。
 云わば細長い腸詰めのような物が、ぶらりと顔のまん中から
 ぶら下っているのである。

五十歳を越えた内供は、沙弥の昔から、内道場供奉の職に陞った
 今日まで、内心では始終この鼻を苦に病んで来た。勿論表面では、
 今でもさほど気にならないような顔をしてすましている。これは
 専念に当来の浄土を渴仰すべき僧侶の身で、鼻の心配をするのが
 悪いと思っただからばかりではない。それよりむしろ、自分で鼻を
 気にしていると云う事を、人に知られるのが嫌だったからである。
 内供は日常の談話の中に、鼻と云う語が出て来るのを何よりも
 惧れていた。

内供が鼻を持てあました理由は二つある。——一つは實際的に、
 鼻の長いのが不便だったからである。第一飯を食う時にも独りでは
 食えない。独りで食えば、鼻の先が鏡の中の飯へとどいてしまう。
 そこで内供は弟子の一人を膳の向うへ坐らせて、飯を食う間中、
 広さ一寸長さ二尺ばかりの板で、鼻を持上げていて貰う事にした。
 しかしこうして飯を食うと云う事は、持上げている弟子にとっても、
 持上げられている内供にとっても、決して容易な事ではない。

いちど 一度 この弟子の代りをした中童子が、嚏をした拍子に手がふるえて、鼻を粥の中へ落した話は、当時京都まで喧伝された。——けれどもこれは内供にとって、決して鼻を苦に病んだ重なる理由ではない。内供は 実にこの鼻によって傷つけられる 自尊心のために苦しんだのである。

池の尾の町の者は、こう云う鼻をしている禅智内供のために、内供の俗でない事を 仕合せだと云った。あの鼻では 誰も妻になる女があるまいと思っただからである。中にはまた、あの鼻だから出家したのだろうと批評する者さえあった。しかし内供は、自分が僧であるために、幾分でもこの鼻に 煩 される事が 少くなっただと思っっていない。内供の自尊心は、妻帯と云うような 結果的な事実には、余りにデリケートに出来ていたのである。そこで内供は、積極的にも消極的にも、この自尊心の毀損を恢復しようと試みた。

第一に内供の考えたのは、この長い鼻を 実際以上に 短く見せる方法である。これは 人のいない時に、鏡へ向って、いろいろな角度から顔を映しながら、熱心に工夫を凝らして見た。どうかすると、顔の位置を換えるだけでは、安心が出来なくなって、頬杖をついたり 頤の先へ指をあてがったりして、根気よく鏡を覗いて見る事もあった。しかし自分でも満足するほど、鼻が短く見ええた事は、これまでにただの一度もない。時によると、苦心すればするほど、かえって長く見えるような気さえした。内供は、こう云う時には、鏡を箱へしまいながら、今更のようにため息をついて、不承不承に また元の経机へ、観音経をよみに帰るのである。

それからまた内供は、絶えず人の鼻を気にしていた。池の尾の寺は、僧供講説などのしばしば行われる寺である。寺の内には、僧坊が隙なく建て続いて、湯屋では寺の僧が日毎に湯を沸かしている。従ってここへ出入する僧俗の類も甚だ多い。内供はこう云う人々の顔を根気よく物色した。一人でも自分のような鼻のある人間を見つけて、安心がしたかったからである。だから内供の眼には、紺の水干も白の帷子もはいらない。まして柑子色の帽子や、椎鈍の法衣などは、見慣れているだけに、有れども無きが如くである。内供は人を見ずに、ただ、鼻を見た。——しかし鍵鼻はあっても、内供のような鼻は一つも見当らない。その見当らない事が度重なるに従って、内供の心は次第にまた不快になった。内供が人と話しながら、思わずぶらりと下っている鼻の先をつまんで見て、年甲斐もなく顔を赤らめたのは、全くこの不快に動かされての所為である。

最後に、内供は、内典外典の中に、自分と同じような鼻のある人物を見出して、せめても幾分の心やりにしようと思え、思った事がある。けれども、目連や、舍利弗の鼻が長かったとは、どの経文にも書いてない。勿論竜樹や馬鳴も、人並の鼻を備えた菩薩である。内供は、震旦の話の序に蜀漢の劉玄德の耳が長かったと云う事を聞いた時に、それが鼻だったら、どのくらい自分は心細くなるだろうと思つた。

内供がこう云う消極的な苦心をしながらも、一方ではまた、積極的に鼻の短くなる方法を試みた事は、わざわざここに云うまでもない。内供はこの方面でもほとんど出来るだけの事をした。

烏瓜からすうりを煎せんじて飲のんで見みた事こともある。鼠ねずみの尿いぼりを鼻はなへなすって見みた事こともある。
しかし何なにをどうしても、鼻はなは依然いぜんとして、五六寸ごろくすんの長ながさを ぶらりと
唇くちびるの上うえにぶら下さげているではないか。

二場

所ところが ある年の秋、内供ないぐの用ようを兼ねて、京きょうへ上のぼった弟子でしの僧そうが、知己しるべの医者いしやから 長ながい鼻はなを短みじかくする法ほうを教おそわって来たき。その医者いしやと云いうのは、もと震旦しんたんから渡わたって来た男おとこで、当時とうじは長樂寺ちやうらくじの供僧ぐそうになっていたのである。内供ないぐは、いつものように、鼻はななどは氣きにかけないと云いう風ふうをして、わざと その法ほうもすぐにやって見みようとは云いわずにいた。そうして一方いっほうでは、氣き軽がるな口調くちやうで、食事しょくじの度毎たびごとに、弟子でしの手数てすうをかけるのが、心苦こころぐるしいと云いうような事ことを云いった。内心ないしんでは勿論もちろん 弟子でしの僧そうが、自分じぶんを説伏ときふせて、この法ほうを試こころみさせるのを待まっていたのである。弟子でしの僧そうにも、内供ないぐのこの策略せんくりやくがわからない筈はずはない。しかし それに對たいする反感はんかんよりは、内供ないぐのそう云いう策略せんくりやくをとる心こころもちの方が、より強つよく この弟子でしの僧そうの同情どうじやうを動うごかしたのであろう。弟子でしの僧そうは、内供ないぐの予期よきとお通り、口くちを極きわめて、この法ほうを試こころみる事ことを勧め出だした。そうして、内供ないぐ自身じしんもまた、その予期よきとお通り、結局けつぎよくこの熱心ねっしんな勧告かんこくに聽ちやうじゆう従じゆうする事ことになった。その法ほうと云いうのは、ただ、湯ゆで鼻はなを茹ゆでて、その鼻はなを人ひとに踏ふませると云いう、極きわめて簡單かんたんなものであった。

湯ゆは寺てらの湯屋ゆやで、毎日まいにち沸わかしている。そこで弟子でしの僧そうは、指ゆびも入れられないような熱あつい湯ゆを、すぐひさげに提いに入れて、湯屋ゆやから汲くんで来たき。しかし じかにこの提ひさげへ鼻はなを入れると、湯氣ゆげに吹ふかれて顔かおを火傷やけどする惧おそれがある。そこで折敷おしきへ穴あなをあけて、それを提ひさげの蓋ふたにして、その穴あなから鼻はなを湯ゆの中なかへ入いれる事ことにした。鼻はなだけは この熱あつい湯ゆの中なかへ浸ひたしても、少すこしも熱あつくないのである。しばらくすると弟子でしの僧そうが云いった。

弟子 ——もう茹った時分でござろう。

内供は苦笑した。これだけ聞いたのでは、誰も鼻の話とは気がつかないだろうと思っただからである。鼻は熱湯に蒸されて、蚤の食ったようにむず痒い。

弟子の僧は、内供が折敷の穴から鼻をぬくと、そのまだ湯気の立っている鼻を、両足に力を入れながら、踏みはじめた。内供は横になって、鼻を床板の上へのぼしながら、弟子の僧の足が上下に動くのを目の前に見ているのである。弟子の僧は、時々気の毒そうな顔をして、内供の禿げ頭を見下しながら、こんな事を云った。

弟子 ——痛うはござらぬかな。医師は責めて踏めと申したで。

じゃが、痛うはござらぬかな。

内供は首を振って、痛くないと云う意味を示そうとした。所が鼻を踏まれているので、思うように首が動かない。そこで、上眼を使って弟子の僧の足に輝のきれているのを眺めながら、腹を立てたような声で、

内供 ——痛うはないて。

と答えた。実際、鼻はむず痒い所を踏まれるので、痛いよりもかえって気もちのいいくらいだったのである。

しばらく踏んでいると、やがて、粟粒のようなものが、鼻へ出来はじめた。云わば、毛をむしった小鳥を、そっくり丸灸にしたような形である。弟子の僧はこれを見ると、足を止めて独り言のようにこう云った。

弟子 ——これを鑷子でぬけと申す事でござった。

内供は、不足らしく頬をふくらせて、黙って弟子の僧のするなりに任せて置いた。勿論弟子の僧の親切がわからない訳ではない。

それは分つても、自分の鼻をまるで物品のように取扱うのが、不愉快に思われたからである。内供は、信用しない医者の手術をうける患者のような顔をして、不承不承に弟子の僧が、鼻の毛穴から鑷子で脂をとるのを眺めていた。脂は、鳥の羽の茎のような形をして、四分ばかりの長さにぬけるのである。

やがてこれが一通りすむと、弟子の僧は、ほっと一息ついたような顔をして、

弟子——もう一度、これを茹でればようござる。

と云った。

内供は やはり、八の字をよせたまま 不服らしい顔をして、弟子の僧の云うなりになっていた。

さて 二度目に茹でた鼻を出して見ると、成程、いつになく短くなっている。これでは あたりまえの鍵鼻と大した変りはない。内供は その短くなった鼻を撫でながら、弟子の僧の出してくれる鏡を、極りが悪るそうにおずおず覗いて見た。

鼻は——あの顎の下まで下っていた鼻は、ほとんど嘘のように萎縮して、今は僅に 上唇の上で意気地なく 残喘を保っている。所々まだらに赤くなっているのは、恐らく踏まれた時の痕であろう。

こうなれば、もう誰も晒うものはないにちがいない。——鏡の中にある内供の顔は、鏡の外にある内供の顔を見て、満足そうに眼をしばたいた。

しかし、その日は まだ一日、鼻がまた長くなりはしないかと云う不安があった。そこで内供は 誦経する時にも、食事をする時にも、

暇ひまさえあれば手てを出だして、そつと鼻はなの先さきにさわって見みた。が、鼻はなは
行儀ぎようぎよく唇くちびるの上うえに納おさまっているだけで、格別かくべつそれより下したへ
ぶら下さがって来くる景色けしきもない。それから一晩寝ひとばんねて あくる日早ひはやく眼めがさめると
内供ないぐはまず、第一だいいちに、自分じぶんの鼻はなを撫なでて見みた。鼻はなは依然いぜんとして短みじかい。
内供ないぐは そこで、幾年いくねんにもなく、法華經書写ほけきようしよしゃの功こうを積つんだ時ときのような、
のびのびした気分きぶんになった。

二場

ところが二三日たつ中に、内供は意外な事実を発見した。それは折から、用事があって、池の尾の寺を訪れた侍が、前よりも一層可笑しそうな顔をして、話も碌々せずに、じろじろ内供の鼻ばかり眺めていた事である。そのみならず、かつて、内供の鼻を粥の中へ落した事のある中童子などは、講堂の外で内供と行きちがった時に、始めは、下を向いて可笑しさをこらえていたが、とうとうこらえ兼ねたと見えて、一度にふっと吹き出してしまった。用を云いつかった下法師たちが、面と向っている間だけは、慎んで聞いていても、内供が後さえ向けば、すぐにくすくす笑い出したのは、一度や二度の事ではない。

内供ははじめ、これを自分の顔がわりがしたせいだと解釈した。しかし、どうもこの解釈だけでは十分に説明がつかないようである。

——勿論、中童子や下法師が晒う原因は、そこにあるのにちがいない。けれども同じ晒うにしても、鼻の長かった昔とは、晒うのにとことなく容子がちがう。見慣れた長い鼻より、見慣れない短い鼻の方が滑稽に見えるると云えば、それまでである。が、そこにはまだ何かあるらしい。

内供 —— 前にはあのように、つけつけとは晒わなんだて。

内供は、誦しかけた経文をやめて、禿げ頭を傾けながら、時々こつこつと呟く事があった。愛すべき内供は、そう云う時になると、必ずぼんやり、傍にかけた普賢の画像を眺めながら、鼻の長かった四五日前の事を憶い出して、「今はむげにいやしくなりさがれる人の、さかえたる昔をしのぶがごとく」ふさぎこんでしまうのである。

——内供には、遺憾ながらこの間に答を与える明が欠けていた。

——人間の心には 互に矛盾した二つの感情がある。勿論、

誰でも他人の不幸に 同情しない者はない。所が その人がその不幸を、

どうにかして切りぬける事が出来ると、今度は こっちで何となく

物足りないような心もちがする。少し誇張して云えば、もう一度その人を、

同じ不幸に 陥れて見たいような気にさえなる。そうしていつの間にか、

消極的ではあるが、ある敵意をその人に対して抱くような事になる。

——内供が、理由を知らないながらも、何となく不快に思ったのは、

池の尾の僧俗の態度に、この傍観者の利己主義を それとなく

感づいたからに ほかならない。

そこで内供は 日毎に機嫌が悪くなった。二言目には、誰でも意地悪く

叱りつける。しまいには 鼻の治療をしたあの弟子の僧でさえ、

弟子 「内供は 法慳貪の罪を受けられるぞ」

と陰口をきくほどになった。殊に内供を怒らせたのは、例の悪戯な

中童子である。ある日、けたたましく犬の吠える声があるので、

内供が何気なく外へ出て見ると、中童子は、二尺ばかりの木の片を

ふりまわして、毛の長い、痩せた彪犬を逐いまわしている。それもただ、

逐いまわしているのではない。

中童子 「鼻を打たれまい。それ、鼻を打たれまい」

と囁しながら、逐いまわしているのである。内供は、中童子の手から

その木の片をひったくって、したたかその顔を打った。木の片は

以前の鼻持上げの木だったのである。

内供はなまじいに、鼻の短くなったのが、かえって恨めしくなった。

するとある夜の事である。日が暮れてから 急に風が出たと見えて、塔の風鐸の鳴る音が、うるさいほど枕に通って来た。その上、寒さもめっきり加わったので、老年の内供は 寝つこうとしても寝つかれない。そこで 床の中で まじまじしていると、ふと 鼻がいつになく、むず痒いのに気がついた。手をあてて見ると 少し水気が来たようにむくんでいる。どうやらそこだけ、熱さえもあるらしい。

内供 — 無理に短うしたで、病が起ったのかも知れぬ。

内供は、仏前に香花を供えるような 恭しい手つきで、鼻を抑えながら、
こう呟いた。

四場

翌朝、内供がいつものように早く眼をさまして見ると、寺内の銀杏や椽が一晩の中に葉を落したので、庭は黄金を敷いたように明るい。塔の屋根には霜が下りているせいであろう。まだうすい朝日に、九輪がまばゆく光っている。禅智内供は、薮を上げた縁に立って、深く息をすいこんだ。

ほとんど、忘れようとしていたある感覚が、再び内供に帰って来たのはこの時である。

内供は慌てて鼻へ手をやった。手にさわるものは、昨夜の短い鼻ではない。上唇の上から顎の下まで、五六寸あまりもぶら下がっている、昔の長い鼻である。内供は鼻が一夜の中に、また元の通り長くなったのを知った。そうしてそれと同時に、鼻が短くなった時と同じような、はればれした心もちが、どこからともなく帰って来るのを感じた。

——こうなれば、もう誰も晒うものはないにちがいない。

内供は心の中でこう自分に囁いた。長い鼻をあけ方の秋風にぶらつかせながら。

(大正五年一月)

1 場

禅智内供：「禅智」は固有名詞、この僧侶の名前です。「内供」は、「内供奉十禅師」の略で、日本の仏教における僧侶の役職の1つです。宮中で天皇の安穩を祈り、天皇の看病、正月に行われる御齋会という行事の読師なども務めます。10人が選出されました。

池の尾：地名です。現在の京都府宇治市池尾を指します。

五六寸：昔の長さの単位「尺貫法」に基づく測り方です。1寸=約3cm。5~6寸は15~18cmほど。鼻にしてはちょっと長すぎますね。

腸詰め：ソーセージのことです。ドイツから日本に製造技術が流入し広まったのは、第一次世界大戦中のことでした。

沙弥の昔：仏門に入り、正式な

僧侶となるために修行している7歳から20歳の僧侶のことです。ここでは「出家したばかりの頃」という意味です。

内道場供奉の職：「内道場」は宮中にある仏教の修行所で、「供奉」は「内供奉十禅師」の略なので、内供の仕事を言い換えて表現しています。

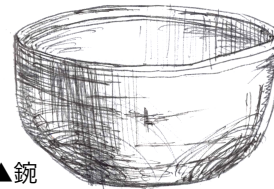
専念に：現代では「専念する」と動詞で使用するのが一般的ですが、ここでは「熱心に」「集中して」という意味で、副詞として使用しています。

当来：仏教の言葉で、必ず来るべき世、つまり来世を指します。

浄土：仏教において、一切の煩惱やけがれ、悪がなく、仏や菩薩が住む清浄な国土のことです。逆に、現世は色々な苦しみや悪がはびこっている穢れた場所、穢土です。

渴仰：現在は一般的に「かつごう」と読みます。喉が渴いた者が水を切望するように仏を求めることです。「随喜渴仰の念」という言葉があります。

鏡：「まがり」とも読みます。お水や食物を入れる器です。木製のものを「椀」、陶磁器製のものを「碗」、金属製のものを「鏡」と書き分けます。



▲鏡

広さ一寸長さ二尺：前出の「五六寸」と同じく「尺貫法」に基づく測り方です。1寸=約3cm、1尺=約30cmですので、この板は、幅3cm長さ60cmほどの笏のようなものと推測されます。

中童子：お寺で、給仕や位の高い僧侶の外出時のお供など、雑用をおこなう12~13歳の少年です。年

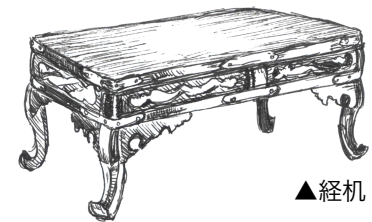
齢や経験に応じて中童子、大童子、上童子など呼びます。

噓：くしゃみのことです。

喧伝：世間に言いふらすことです。宣伝と似ていますが、喧伝の場合は広める情報が必ずしも良いことではない点が異なります。

俗でないこと/出家した：ここでは、禅智内供が僧侶の身分であることを指しています。明治時代以前、宗派によっては、妻を持つことが禁じられていました。

経机：経本を載せて読んだり写経したりするための低い机です。現代では、仏壇の近くに置き、お線香や数珠を置いておく人も多いようです。

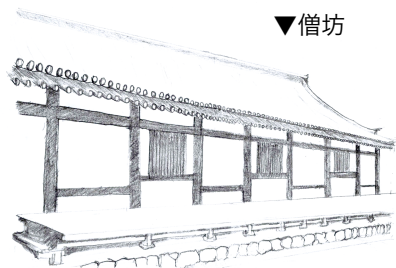


▲経机

観音経：『妙法蓮華経（法華経）』の中の「観世音菩薩普門品」という章のことです。「生きていく上であらゆる苦難に遭遇するが、観世音菩薩の名を唱えれば、救っていただける」という内容です。

僧供講説：「僧供」は僧に対する供養、僧へのお供えもののこと。「講説」は、講義し、説明することです。僧侶に寄付や喜捨をして、説法を聴くイベントではないかと思われます。※ご存知でしたら情報をお寄せください

僧坊：寺院内にある僧侶たちが住む建物のことです。「僧房」とも書きます。



▼僧坊

湯屋：通常はお風呂屋さんのことです。ジブリアニメ「千と千尋の神隠し」のお風呂屋さんをイメージする方もいるのではないのでしょうか。ここでは、お寺にあった僧侶たちが入る風呂場のことです。また、神聖な場所でお務めに従事する前に体を浄めたり、断食したり、休息したりするための建物のことを指す場合もあります。

僧俗：「僧」は僧侶たち、「俗」は俗世間の民間人のことです。

紺の水干：「水干狩衣」の略です。

平安時代における平民男性の普段着でしたが、やがて貴族や武家でも着用されるようになりました。

白の帷子：裏地の付いていない薄衣着物、装束の下に着る服です。



▼水干

▼帷子



柑子色：柑子蜜柑の色です。明るい黄赤で、蜜柑色より少し薄い色をしています。仏教でよく使われます。

帽子：僧侶や尼僧が身につけるもので、頭に被るものと、マフラーやスカーフのように首に掛け、首元まで引っ張って立てる、「襟帽」「護襟」と呼ばれるものがあります。



▲帽子

椎鈍：椎の実を使って染めた色で、青みがかかった灰色です。

法衣：通常、「ほうえ」と読みます。僧侶や尼僧の制服です。年代や宗派によって異なりますが、袂の長い着物の上に、袈裟という四角い布を肩から斜めに巻き付け、下半身には、袴を履きます。



▼法衣

内典外典：仏教を中心に見て、「内典」は仏教の教典の書物、「外典」は儒教など他の宗教のものを指します。「仏教だけに限らず、様々な宗教の教典」という意味で使用しています。

心やり：「心遣り」と書きます。ふさいだ気持ちを晴らすことです。

目蓮：お釈迦様の内弟子の1人、「目犍連」の略称です。

舍利弗：^{しやりほつ}お釈迦様の弟子で、^{もくけんれん}目犍連と並んで「二大弟子」と呼ばれます。

竜樹：^{りゅうじゆ}古代インドの僧侶で、大乘仏教の經典の解説書を多く書き残しました。

馬鳴：^{めみよう}古代インドの僧侶で、詩などサンスクリット文学の先駆者です。

菩薩：^{ぼさつ}仏になること、悟りを開くことを目指して修行に励む人のことです。

震旦：^{しんたん}中国の古い呼び方で、「振旦」「真丹」とも書き、「しんだん」とも読みます。古代インド人は中国のことをサンスクリット語で、「秦の土地」という意味で「チーナスターナ」と呼びました。その音を漢字にしたものです。

蜀漢：^{しよくかん}中国の三国時代に、^{りゅうび}劉備が建てた国です。『三国志』に登場することで有名な、^ご魏・^ご呉・^{しよく}蜀のう

ちの蜀のことです。現在の中国の四川省、雲南省、貴州省一帯です。

劉玄德：^{りゅうげんとく}『三国志』で知られる中国の武将、^{りゅうび}劉備のことです。「劉」は姓、「備」は諱、「玄德」は字です。諱は親や主君しか呼ぶことを許されない名前のため、親しい人からは「玄德」というニックネーム（字）で呼ばれていました。

2場

知己：^{しるべ}通常「ちぎ」と読みます。自分のことをよく理解してくれている人、親友、知人などのことです。

供僧：^{くそう}「供奉僧」の略です。本尊や神社に仕える僧侶のことです。

聽從：^{ちようじゅう}他人の言うことを聞き入れ、それに従うことです。

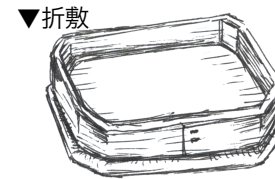
提：^{ひさげ}「提子」とも書きます。注ぎ口と持ち手がある小鍋形の器で、

銀または錫でできています。水、湯、粥、酒などを持ち運んだり温めたりするのに使用します。



▲提

折敷：^{おしき}食器を載せる食台の一種で、お盆のようなものです。四角い木の板の周囲に低い縁をつけたものです。



▼折敷

鑷子：^{けぬき}通常は「じょうし」と読みます。ピンセットや^{かんざし}簪のことで



▼鑷子

四分：^{しぶ}昔の長さの単位「尺貫法」に基づく測り方です。1分=約3mm。4分=約12mmです。

八の字をよせる：^{はちじ}眉を八の字にして眉間にしわを寄せること、顔をしかめることです。

残喘：^{ざんぜん}残り少ない命のことです。長かった鼻が短く縮んでやっとな残っていることを表しています。

誦經：^{ずぎよう}「じゆきよう」「ずきよう」とも読みます。經文を声に出して読むこと、暗唱することです。

法華經書写の功を積んだ時：^{ほけきようしよしや}「^{こう}妙法蓮華經（法華經）」^{とき}を書き写す、写經をすることです。写經は、祈りの実践であり、修行の一環です。禅智内供の「のびのびした気分」を、写經をやり遂げた時の気持ちに喩えています。

3場

下法師：^{しもほうし}最も身分の低い僧侶で、

雑用などに使われます。

つけつけと：遠慮や加減をしないで思ったことをはっきり言う様子、無遠慮な様子を指します。「ずけずけと」と同じです。

誦しかけた経文をやめて：お経を唱えることを「誦す」といいます。声に出して読んで、途中で止めた様子を表しています。

普賢：大乘仏教で崇拜される菩薩のうちの一つです。絵画や像の形で、お寺に置かれます。

「今はむげにいやしくなりさがれる人の、さかえたる昔をしるぶがごとく」：現代語にすると、「今、大変落ちぶれてしまった人が、以前の自分の栄光あった頃を懐かしく思うように」となります。禅智内具は、無意識に「鼻が長かった頃の方が良かった」と感じているようです。引用のような形ですが、出典は不明です。

法慳貪：「慳」は物惜しみをすること、「貪」は貪欲なことを表し、通常は「慳貪」のみで仏教においてあさましい状態を表します。「法」は芥川龍之介が付けたもので、「仏法」を表していると考えられます。

形犬：むく毛の犬、毛のふさふさと垂れた犬のことです。

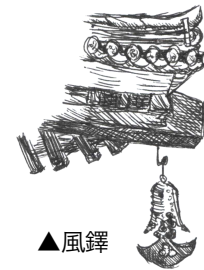


▲形犬

なまじいに：「なまじ」と同じで、中途半端や不徹底な状態を指す言葉ですが、ここでは、「期待される事態とはならず、かえって好ましくない結果を招く」という方の意味で用いられます。「禅智内供

は、変に鼻を短くしてしまったため、逆にそのことが恨めしくなった」ということです。

風鐸：仏堂や仏塔の軒の四隅に吊す、青銅製で鐘の形をした鈴です。風鈴と似ています。



▲風鐸

まじまじしていると：ここでは、目をぱちぱちする様子、眠れない様子を指します。少しも眠らないでいるようすを表す「まんじりともせず」という表現は、「まじまじともせず」から転じたものです。

香花：仏に供えるお香と花です。

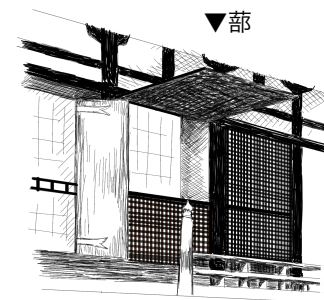
4場

九輪：五重塔など、仏塔の頂上に置かれる、九つの輪が連なった飾りです。それぞれが、5の智如来と4の菩薩を表しています。



▼九輪

部：平安時代から、寝殿造の住宅や社寺で使われた、格子の板戸です。日光や風雨をさえぎるために付けられました。蝶番で上半分が動くようになっていて、水平に釣り上げて開けます。



▼部

Podcast ののラジオ



好評配信中！

視聴・購読はこちらから

<https://gekidannono.com/wp/archives/podcast>

劇団ののと読む 朗読テキスト「鼻」 Podcast 配信版

発行日 2018年11月1日

著者 芥川 龍之介

編集 劇団のの

発行 劇団のの

<https://gekidannono.com/>

radio@gekidannono.com

※本文は、青空文庫様掲載の原文を加工したものです

底本 芥川龍之介全集1

出版社 筑摩書房（ちくま文庫）

初版 1986年9月24日

入力版 1997年4月15日

図書カード URL

<http://www.aozora.gr.jp/cards/000879/card42.html>

